

特集

二〇二〇 日建連表彰

昨年末、日建連は「日建連表彰二〇二〇」の受賞案件を発表した。日建連表彰は、土木分野の「土木賞」と建築分野の「BCS賞」により構成する新たな表彰制度であり、今後、両部門を一体とするこの日建連表彰が、わが国の建設の成果と意義を後世に残すことになる。初回は、土木賞（二件）とBCS賞（一五件、合わせて二七件が顕彰された。新型コロナウイルス感染症の影響により選考が難航するなか、初となる土木・建築両分野での顕彰は、建設の歴史に深く刻まれることになろう。改めてこの顕彰の歴史と意義について総括する。



土木協

建築協
合併

旧日建連

新日建連誕生

二〇二一年

一九六〇年
第一回BCS賞



日建連表彰の社会的意義

「優秀な建築物」と
「良質な社会資本」への顕彰

建設事業は土木と建築を両輪として、わが国の国土と都市、社会基盤を構築し、支え続けてきた。その歴史や経緯を後世に継承するこ

とは、建設業界の大きな使命でもある。
「優良建築物の表彰により建築業界の一段の向上発展を図るとともに、選考の基準として施工技術に一層の重点を置くことで、わが国の建築技術の進歩向上に大いに貢献し、また、設計の芸術性とともに施工の重要性が広く理解されることを願う」。旧建築業協会(Building Society/BCS)の初代理事長である竹中藤右衛門氏が、約六〇年前にBCS賞を発意し

「施工プロセス」に重点を置いた評価を旨とした。プロジェクト規模の大小に関わらず、省資源化やリサイ

たのはこの考えに基づく。加えて、

建築物のカタチやこれを実現する技術だけではなく、背景にある人間の意志と矜持をも後世に残すには、建築主、設計者、施工者の三者による理解と協力が必要である。一九五九年の旧建築業協会の設立と同時に始まったBCS賞の意義はそこにあつた。物質的な豊かさを追い求めていた高度成長期にあつて、建築主、設計者、施工者を三位一体としてその功績に目を向ける慧眼と志は連綿と受け継がれ、今回で六一回を数えた。良好な建築資産の創出を促し、文化の進展と地球環境保全に寄与することを目的として、「優秀な建築物」を顕彰するのがBCS賞だ。

一方で、日建連には、わが国の経済や国民生活を根底から支える社会基盤の整備を担う土木分野を対クル、生産性向上施策や情報化施工の推進といった広範な評価軸に照らし功績を測る。その物差し以前に、公共性、地域社会においてどのように貢献しているかが大きな視点になることは言うまでもない。

業界の発展を超えた表彰制度として

第一回土木賞には、発注者からの応募や会員企業以外のプロジェクトを含め五八件の応募があり、特別賞を含めた一一件が栄えある受賞を果たした。過去に例を見ないほど特殊で過酷な条件下において環境負荷を抑制し、新たな環境の創生に寄与した事業や、生産性の向上により、社会的要請である早期完成を実現したプロジェクトが目立つ。賞のコンセプト通り、数々の課題を克服するために関係者が一丸となつて取り組んだ「施工プロセス」が大きな評価軸となっている。

第六一回BCS賞の応募総数は、全国二七都道府県から七五件に及び、うち一五件が受賞した。応募作品は複合施設や学校、事務所ビルを

象とした表彰制度が存在していな

かった。気候変動に起因する自然災害の激甚化に対応すべく、国土強靱化が喫緊の課題となるなか、広範囲にわたる会員企業の活動領域を踏まえて、橋梁や道路、ダムといった「良質な社会資本」についても、その功績を顕彰していく必要がある。そうした視点から創設されたのが土木賞だ。

土木賞も卓越した新技術、理想的な構造のみを顕彰するものではない。これに関与する「人」に光を当てていくことを前提としているのは、土木賞とBCS賞に共通する精神だ。しかし、建築物に比べてインフラ構造物に関与する対象者は発注者、設計者、施工者ととどまらず、多岐にわたる。専門工事業者や建設業以外の企業などのステークホルダーが一体となった協働、つまり

はじめ、病院、博物館、宗教施設に至るまで、その建築用途は多岐にわたる。注目すべきは建築主からの応募数が過去最高を記録したことだ。更に、東京や大阪といった大都市圏以外のエリアからも七作品が受賞した。BCS賞の認知度が全国的にも高まり、設計、施工といった業界を超え、発注者層においてもそのステータスは定着しつつある。

土木賞、BCS賞の受賞案件に共通して言えることは、ICTの活用、高精度な品質管理、省エネルギー施策、地域環境との融和といった社会的な課題、時代の要請に真摯に対応した事業が選ばれていることだ。その時々々のニーズに定める品質を形にし、目標に向けて取り組む人々の英知と実行力が日建連表彰の評価軸の根幹にある。

建設業界が大きな節目を迎えている今、日建連表彰は業界の発展のみならず、この国の文化と国民生活の向上、更には地方創生や環境保全に寄与するものでなければならぬ。将来の建設業界に向けた大きな指針となるべく、日建連表彰がスタートを切った。

日建連表彰 2020の概要

募集期間 2020年1月6日～1月31日

選考の範囲 土木賞:土木分野の構造物・プロジェクトで2019年末までに概ね竣工したもの
BCS賞:日本国内において建築された建築物ないしは建築群で、2020年4月30日時点において供用開始後1年以上を経過(2019年4月30日までに供用開始)したもの

応募手続き 土木賞:施設管理者(発注者等を含む)、設計者、施工者とこれを支える関係者のいずれかが行う
BCS賞:建築主、設計者、施工者のいずれかが行う

選考期間 2020年2月～12月

表彰式 2021年4月19日(予定)

鼎談

「日建連表彰二〇二〇」受賞案件の発表を機に、宮本洋一日建連表彰委員長と、選考に当たった両賞の選考委員を代表して木村亮土木賞選考委員長、後藤春彦BCS賞選考委員による鼎談を開催。日建連表彰創設の経緯、土木と建築の成果を継承する意義について熱い議論が交わされた。

建設業の功績と価値を未来へ

土木と建築が一体となった

日建連表彰

宮本 日本建設業団体連合会、日本土木工業協会、建築業協会が合併して現在の日建連が発足したのは二〇一一年四月のことでした。国内の優れた建築物を顕彰するBCS賞は合併後も建築本部の主要事業として継承されてきました。日建連の会員企業は土木・建築両分野で幅広く活動しているので、土木も含めた新しい表彰制度が必要ではないかとの声も、三年ほど前から聞こえてくるようになりました。これを受けて二〇一八年の七月に検討会を立ち上げ、日建連としてふさわしい表彰のあり方をゼロから検討してきたのです。

木村先生には選考委員長として、土木賞の企画段階からご尽力いただけてきましたね。

木村 最初に日建連の事務局から土木分野の賞を作りたいと聞いた時、既存の賞との差別化が重要だと思いました。土木分野の主な顕彰制度として「土木学会賞」がありますが、施工者を対象とした賞はあまり聞いたことがありません。更に日建連には六〇年以上の歴史を誇るBCS賞がありますよね。そんななか、どのようにバランスを取られることは名譽なことですから、切り口をどこに設けるかを何回も議論した結果、「施工プロセス」にたどり着いたのです。

統と精神を引き継ぐ。新たに設ける土木賞は、BCS賞と考え方や方向性を共有する。この二つを一体として顕彰することに意義があります。そこにこの表彰の独自性があります。それが関係者の総意でした。BCS賞の選考委員として三年目を迎える後藤先生は、同賞の意義や土木賞と一体的に表彰することについてどのようにお考えですか。

い価値を生み出したか、また、設計者には従来とは全く違う次元に到達しているかが問われます。すなわち、作家性、新規性、先進性を重視するということです。

宮本 建築主、設計者、施工者を三位一体として、多角的にその価値を評価するBCS賞の視点とはだいぶ異なりますね。

後藤 BCS賞において、設計者は、建築主の考えを空間に翻訳して施工に接続させるプロジェクトマネージャーとして捉えられており、背景にある建築主の想いや施工者の志を一体として評価します。想いをうまく形にしてこの世に産み落とす。私は、建築とは祝福されて誕生するべきものだと考えているので、BCS賞独自の視点は、優れた

日建連表彰委員長
(清水建設株 会長)

宮本 洋一



日建連としての一体感の醸成に向け、新たな一步を踏み出す。

日建連表彰 土木賞選考委員長
(京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻 教授)

木村 亮

名もなき土木技術者たちの功績を、後世に残したい。

日建連表彰 BCS賞選考委員

(早稲田大学創造理工学部建築学科 教授・大学院創造理工学研究科建築学専攻 教授)

後藤 春彦



建築主、設計者、施工者。三者の想いや志に光を当てたい。



宮本 洋一
Yoichi Miyamoto
清水建設株式会社 会長

建築物を賞賛すべく、大変貴重なものだと考えています。

一方で土木分野における表彰の代表格である土木学会賞は、その評価軸として、「時代を画する土木事業」を旨としていますよね。従来の期待に対して、ブレイクスルーとなる斬新さがあるかということ。そのため、事業関係者にはいわば総合的なプロデューサーの役割が求められます。日建連の土木賞は、更に広範なステークホルダーに目を向けており、BCS賞同様の視点を持つて創設されたこと、これを一体として顕彰する意義は大きいと思います。

矜持と使命感を尊重した第一歩

宮本 私自身は長らくこの業界で建築に携わってきましたが、日建連では土木本部長を務めています。合併して一〇年を迎えるのに土木分野の表彰がないことについて、実は忸怩たる想いがあつたのです。そこでBCS賞ありきではなく、ゼロベースで新しい表彰制度を考えよう

と。日建連として建設業界全体の功績を一体的に顕彰する仕組みを構築しようとして取り組んできました。

木村 BCS賞の三位一体の評価軸を土木賞がどのように共有できるか、難しいテーマですがとにかくトライしようと思えました。しかし、模擬選考の候補案件を拝見した際にイケると自信が湧いてきましたね。多くの企業が積極的にアピールする姿勢を見せてくれたのです。また、訴求ポイントの明確化、有効な判断基準、論理的なプレゼンテーションなどを考慮しながら、申請書類や選考の基準についても意見を申し上げましたが、その都度変更を加えながら臨機応変に対応していただきました。その柔軟さもあって、日建連表彰としての一体感が醸成できたのではないかと思います。

宮本 土木と建築の両分野を一つの賞に統合する考え方もあるかと思いますが、ところが、両分野にはそれぞれ矜持があります。「BCS賞の歴史をゼロに戻すのか」「土木は土木として独自の評価軸が必要だ」。そうしたことを熟慮した結果としてBCS賞を継承し、土木賞を

新設することに落ち着きました。

木村 土木には、称賛されなくても社会基盤を黙々と整備するといった気概やプライドがあるのかもしれない。下水道やトンネルに自らの名前など残らなくてもいい。そうした意味では土木は名もなき技術者たちのフィールドです。かと言ってその事業の意義、技術の継承が不要というわけではありません。日建連表彰を機に、日建連をはじめとする業界団体や土木業界が、土木建造物の役割やその施工に携わる人々を表彰、PRする場をもっと作っていただけのこと期待しています。

後藤 建設プロジェクトは非常に複雑な仕事です。短期間で効率よく安全に事業を完結することが何よりも求められます。しかし、困難な条件下でその使命を果たしたか、各建設会社の得意分野が最大限生かされたかは評価の対象になり得ます。これらの視点が土木・建築に問わず日建連表彰全体の評価軸として確立されていることは、重要なことだと思えますね。

宮本 数々の課題をクリアしながら動き出した日建連表彰ですが、そ

の途端にコロナ禍に翻弄されることになってしまいました。四月に選考が一時休止し、再開した後も現地調査が難航するなど選考委員の先生方にはご負担をお掛けしましたが、ご尽力のおかげで二〇二〇年のうちに受賞案件をお披露目することができました。まずは一歩を踏み出したことに安堵しています。

施工プロセスと現場の情熱から生まれる顕彰

宮本 ここで、二〇二〇年の選考結果について振り返ってみたいと思います。土木のプロジェクトは建築に比べて長期にわたり関係者も多くあります。そのため施工プロセスに貢献した多様な関係者を顕彰の対象とした土木賞は、表彰者数も多くなりました。BCS賞は、今年も多数の応募が寄せられ、全国から多彩な用途の受賞作品が選ばれました。両賞の評価において共通している

のは、社会の要請に込められているかという視点だっと思えます。

後藤 目に見えない部分においてもそのプロジェクトがどのような公

共性を持っているか、それを実現した優れた施工プロセスは大きな判断材料になりますよね。

木村 第一次選考として、全五八件分の資料を送っていただきました。分厚い二冊のファイルがデスクに鎮座する風景は壮観でしたよ。公共と民間、規模の大小に関わらず、よくぞこれだけ幅広い分野から手を挙げていただいたと感謝しています。書類だけで選考する難しさはありましたが、我々大学の関係者だけではなく、建設業界専門誌の編集者、国土交通省の方をはじめ、関連する業界団体の方々など多様な視点で絞り込むことができました。賞に対する事務局の真剣さ、使命感にも敬意を表したいと思います。

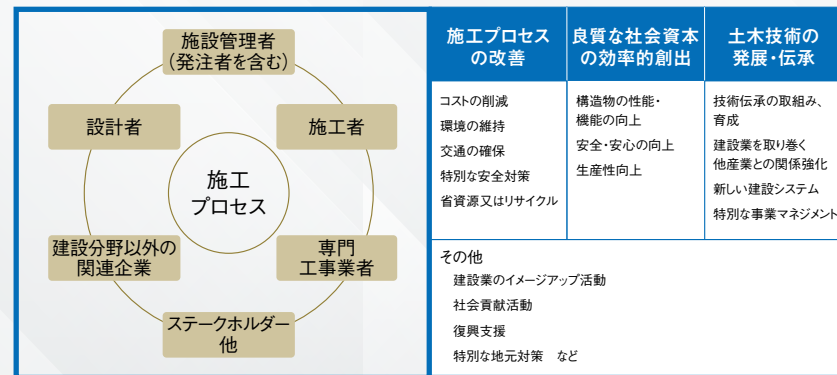
宮本 確かに、書類だけの判断、選考は難しいですね。

木村 BCS賞では、建築主、設計者、施工者の三者と選考委員が揃って行う現地調査が選考の要だと思えますが、土木は竣工後の現場に立つたところで施工プロセスが見えにくい。そのため、事業に向けた想いや施工での創意工夫を我々選考委員に対してプレゼンテー

選考の視点

土木賞

多様な関係者との良好な関係

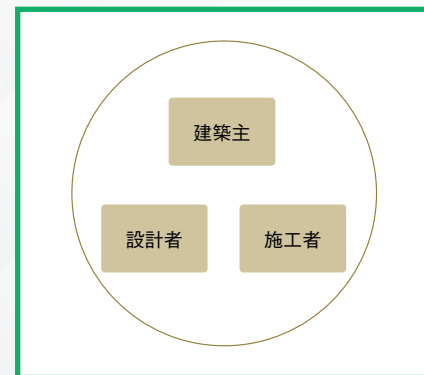


土木賞の選考は、プロジェクト・構造物の事業企画、及び計画・設計、施工、環境、維持管理等に関する総合評価により行われる。そのなかで、施工プロセスに関係する施設管理者（発注者等を含む）、設計者、施工者とこれを支える関係者の相互の協力関係が良好であること、また、施工プロセスの視点（施工プロセスの改善、良質な社会資本の効率的創出、土木技術の発展・伝承など）が重視される。

BCS賞の選考は、建築に係る事業企画、計画・設計、施工、環境及び建築物の運用・維持管理等に関する総合評価に基づいて行われる。そのなかで、建築主、設計者、施工者の相互関係が良好であること、すなわち建築主、設計者、施工者による「三位一体」が重視される。

BCS賞

建築主、設計者、施工者の三位一体



現場の声と熱い想いを聴く 土木賞選考プロセス

第一次選考

書類審査

第二次選考

現地調査:

第一次選考で選ばれたプロジェクト・構造物を対象に、現場を訪れ、応募関係者から説明を受ける。

応募関係者によるプレゼンテーション:

パワーポイントを用いて、選考委員に向けてプロジェクト・構造物の特徴を説明する。

評価:

現地調査、プレゼンテーションの結果から総合的に評価が行われ、受賞案件が決定する。



現地調査の様子

プレゼンテーションの様子



木村 亮

Makoto Kimura

1960年3月15日生まれ

京都府出身

京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻 教授

1985年 京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修士課程修了
1985年 京都大学工学部交通土木工学科 助手
1994年 京都大学工学部交通土木工学科 助教授
1996年 京都大学大学院工学研究科 助教授
2006年 京都大学国際融合創造センター 教授
2007年 京都大学産官学連携センター 教授
2010年 京都大学産官学連携本部 教授
京都大学大学院工学研究科 教授 現在にいたる

クションしていただくことで、施工プロセスを十二分に理解することができました。

宮本 特に印象に残っているプレゼンテーションはありますか。

木村 そうですね。すべてがわかりやすく、想いの伝わるものでしたが、例えばある現場の所長のプレゼンテーションは、最初は淡々と始まりましたが、質疑応答では情熱がみなぎっていました。この熱量が選考を左右する要素の一つになったと言えるかもしれません。第二回以降はその情熱とともに、ビデオやタイムラプス等の映像を駆使したプレゼンテーションに期待したいと思います。

後藤 関係者が一堂に会したプレゼンテーションは壮観でしょうね。BCS賞では実際に使われている建築物に赴いて行う現地調査で、建築主の想いを聞くことを重視しています。どのような想いでこのプロジェクトを立ち上げたのか。建築主の情熱が選考に大きく作用することは土木賞と同様です。建築が大好きで情熱にあふれた建築主もいれば、あまり口を出さず、関係者の参加による意見聴取を重視

している方もいます。これも書類上ではわからない、現地調査だからこそ知り得るポイントです。

時代の要請に応え

社会に役立つ新機軸を

宮本 今回のBCS賞の応募作品にはどのような傾向がありましたか。

後藤 大学をはじめ教育関連の建物が多かったように思います。学生に向けた魅力的なキャンパス、学びや研究の場を創造することに腐心されています。注目したいのは研究や教育に特化した機能のみならず、オープンスペースなどに「出会いの場」としての機能を持たせようとする工夫が見られたことです。このようなニーズが高まっているのでしょう。

宮本 構造や建築技術だけではなく、そうした要素が実現する成果、どのように役に立っているかという視点は大変重要ですね。

後藤 ある作品では、交流、出会いの場の理想的なあり方を模索するプロセスが評価されました。図書館、公民館、子育て支援など複数の

施設の機能を包含する建物が出発点でしたが、市民の声を汲みあげるワークショップで機能の融合についての議論が始まりました。市民から「施設のいたるところに本があった方が楽しいのではないか」という声が上がります。例えば公民館のキッチンに料理関係の本があってもいいと。これを実現するとすると司書さんは大変ですし、特定の本を探そうとするとこんなに不便な図書館はありませんが、本との予想外の遭遇、人と人の偶発的な出会いが期待できます。設計は複雑化しますが、その可能性を探った行政の英断とそれに応えた現場の取組みは称賛に値します。

宮本 公共事業のコンセプトを変更することは容易ではありませんね。

後藤 首長があまり口を挟まず、職員が懸命に市民の声に耳を傾けることで実現できた事例です。最初に設計者からそうした提案があっても受け入れられなかったかもしれませんが、首長と職員、市民、そして設計者、施工者が並走し、共に成長しながら実現できた建築物です。現

にきらりと光るものがあれば応募するべきだという意識が生まれているのではないのでしょうか。

今回受賞した八ッ場ダムは紆余曲折がありました。早期施工という要求に見事に応えました。慎重さが求められる試験湛水の際には、台風の影響で一挙に水を溜めることになった稀有な事例です。結果としてほとんど漏水はなく、治水効果を証明しました。第一回の土木賞に相応しいプロジェクトです。

宮本 豪雨により図らずも膨大な雨量を貯留することができたのですよね。後日、下流に暮らすおばあさんが「このダムがなかったら大変なことになっていた」と涙ながらに語ったというエピソードを耳にしました。

木村 福島の凍土壁も印象に残っています。難しい技術だからこそ侃々諤々の議論がなされましたが、覚悟を決めて取り組んだ。進化の途上にある技術ではありませんが、かつてない施工プロセスに挑んだことは土木賞に値します。

私が個人的にもっとも注目したのは、関西の名門ゴルフ場の改修事業です。九〇年前の開設当時の設計コ

地調査では関係者の熱い想いが伝わってきました。

宮本 土木賞では、五八件の応募案件のうち公共工事が五一件と圧倒的でした。発注者を主体とした応募が七件、専門工事業者から五件、会員以外からも二件が寄せられています。第一回の選考においてどのような印象を持たれましたか。

木村 発注者、施工者に関わらず、苦勞して現場を全うしていることを正当に評価してほしいという積極性を感じられました。どの案件、どの現場にも、並々ならぬ苦勞がにじんでいました。発注者と施工者が一体化して築き上げた構造物からは、関係者全員の愛着さえ感じられました。

宮本 関係者を広範にわたって顕彰する土木賞のコンセプトが既に認知されているということかもしれませんね。加えて、規模に捉われない応募があったことも大きな成果です。小規模な案件にも輝きを放つところは必ずあります。そうした独自の技術や取組みに更に光を当てたいですね。

木村 発注者にしても、自らの事業

※タイムラプス:1枚ずつ撮影された写真をつなげて再生することで、コマ送り動画のように見える撮影方法。「低速度撮影」や「微速度撮影」とも呼ばれる。



後藤 春彦

Haruhiko Goto

1957年4月9日生まれ
富山県出身
早稲田大学創造理工学部建築学科 教授
大学院創造理工学研究科建築学専攻 教授

1987年	早稲田大学大学院理工学研究科博士課程修了 工学博士
1984年	早稲田大学理工学部 助手
1990年	三重大学工学部 助教授
1994年	早稲田大学理工学部 助教授
1998年	同教授 現在にいたる
2010年	早稲田大学創造理工学部 学部長 早稲田大学創造理工学研究科 研究科長 早稲田大学理工学術院 副学術院長
2012年	日本都市計画学会 会長
2018年	早稲田大学 理事 現在にいたる
2019年	日本建築学会 副会長 現在にいたる

りが人生を懸けて達成したことに大きな価値を感じました。
宮本 災害からの復旧・復興は建設業界が総力を挙げて対応してきた大きなテーマです。日建連表彰にはそうした視点、自覚も求められると思います。
土木と建築の新たな地平を拓きたい
宮本 日建連としての、また土木と建築の一体感が土台にある日建連表彰ですが、そもそも土木と建築に距離があることに違和感があります。両分野の融合は一朝一夕には難しいことですが、実現できれば、施工プロセスに大きく寄与することもできると考えています。建設が土木と建築を分離して語られるのは日本ぐらいなのではないでしょうか。
木村 私も、日本では土木と建築が乖離しているように思います。その境界を埋めるような事例が日建連表彰で登場すれば面白いですね。土木賞はその要となるポテンシャルが高いと思います。技術的な知見をリードするのは日建連の会

あつて意識も変わりつつあります。
木村 過去に某大手新聞社の小学生新聞の取材を受けたことがあります。その際に記者から「土木は子どもたちの興味を引くトピックスの宝庫だ」と言われました。日建連表彰を広報や教育のツールとして、建設業について社会にアピールできるようなれば嬉しいですね。建設のトピックスに触れる機会を誘発していくことも我々の使命かもしれません。
後藤 私の研究室に籍を置いているフランス人留学生は専門が地理学なのですが、的確な建築評論ができます。理由を尋ねると、フランスの新聞には建築評論のコラムがあり日常的によく読んでいるそうです。街中のカフェで市民が建物について議論をする土壌があるんです。残念ながら日本はそこまでに至っていません。マスコミやジャーナリズム、教育界もそうしたことに目を向けるべきでしょう。
宮本 日建連表彰の評価軸の大前提は土木賞、BCS賞ともに国民の社会生活にどれだけ役に立っているかということです。「優秀な

員企業、建設業界です。高層ビルを建てる建築、これを支える地下構造を担う土木など、わかりやすいところからボーダレスに認識されるようになればいいですね。
後藤 一二人いる選考委員の合議で決めるBCS賞にはそれだけ多様な視点が反映されやすいと言えます。今後は、土木と建築の両分野が交わるような領域が生まれるかもしれないという期待感もあります。事実、土木的な発想で橋桁を架設するように建築物の梁を構築する手法も提案されています。土木と建築の両面を持つ建物、そうした視点も対象になってくるとしたら、表彰を一体として展開する意義がより大きくなりますよね。例えばまちづくりをテーマにした案件など、広がりや可能性があると思います。
宮本 土木と建築が分離してしまっている背景には、歴史的な事情もあるのでしょうね。欧州の発想は、都市国家の建設です。都市全体で建物やインフラの建設がどうあるべきかを論じてきました。一方、日本の建築は木造家屋の視点から出発しました。その過程で治水など

ンセプトを再現するというプロジェクトでしたが、結果としてフェアウェイの真ん中に大きなバンカーがあるというとてもないコースになりました。しかし、当時の設計者の志に再度息吹を与えようとした発想と姿勢は評価できる。今回は受賞に至りませんでした。こうしたユニークで多様な価値観をベースとしたプロジェクトには、これからも是非応募していただきたいものです。
一方で、海洋土木の案件が少なかったように思います。東北沿岸部の震災復旧事業での優れた事例はたくさんあるはずですが、港湾に限らず災害復旧に関わる土木事業は土木賞に相応しいと考えているので、今後その代表格として防潮堤などに期待したいですね。

背景に見られる作品がありました。従前の施設を復旧させるだけではなく、市民と協働してこれまでにないまちづくりの象徴ともいえる事業を実現したのです。行政の産みの苦しみもあつたでしょう。設計者、施工者だけではなく関係者一人ひと


建築物「良質な社会資本」の「優秀な良質」の意味も時代とともに変わるでしょう。災害時の対応力や回復力の有無、二〇五〇年カーボンニュートラル、そしてコロナ対策など、新たな評価軸が生まれてくるかもしれません。スマートシティ、情報化施工、DX（デジタルトランスフォーメーション）などへの取組みについても、建設業界では重要となつていきます。技術をどう進化させるかが目的ではなく、結果としてどのような社会を創造するのかが大事なことで、その視点は土木、建築両側面から語られるべきです。有用性が時代とともに変わっていくことを敏感に捉えながら、表彰の意義を深めていきたいですね。
木村 担い手の確保という側面から、日建連表彰を学生や若者に向けて横断的に活用することは効果的です。私は大学で就職担当をしています。私は大学で建設業界の魅力を探りながら、日建連表彰の賞が加わりました。幅広くアピールすることが必要ですね。未来の建設業界、次世代に向けた発信の可能性を探りながら、日建連表彰の進化を目指していきたいという想いを強くしました。

は現実的な建設、施工という面は、ややないがしろにされている気がします。そこで、例えば施工プロセスで興味を訴求できるような資料を作ったかどうかでしょうか。日建連表彰のプレゼンテーション資料はそれだけで貴重な講義資料にもなり得ます。先生はそれを使ってよりリアルで高度な講義をすることができるといいでしょう。教科書には書いていない土木、建築を概観できるツールの開発です。日建連には是非、そうした活動にも積極的に取り組んでもらいたいですね。
宮本 受賞案件は冊子として残されますが、それだけではなく時代背景の検証をするべきかもしれません。その時代にどのような建物や構造物が表彰されたのか。BCS賞には一、〇〇〇に迫る受賞作品があります。そこに新たに土木賞が加わりました。幅広くアピールすることが必要ですね。未来の建設業界、次世代に向けた発信の可能性を探りながら、日建連表彰の進化を目指していきたいという想いを強くしました。

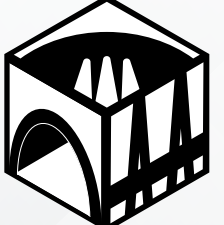
日本大震災からの「創造的復興」が背景に見られる作品がありました。従前の施設を復旧させるだけではなく、市民と協働してこれまでにないまちづくりの象徴ともいえる事業を実現したのです。行政の産みの苦しみもあつたでしょう。設計者、施工者だけではなく関係者一人ひと

が乖離しているように思います。その境界を埋めるような事例が日建連表彰で登場すれば面白いですね。土木賞はその要となるポテンシャルが高いと思います。技術的な知見をリードするのは日建連の会

の土木と馴染みが薄くなったのかもしれません。
後藤 私の大学では学生の修士論文を、土木系と建築系でそれぞれ三つある研究室が合同で審査することにしています。そうすることで建築と土木の学生の興味分野の重なりをうかがい知れることもでき、とても興味深いのです。昔は数式だらけだった土木の論文もだいぶ柔らかくなりました。学生たちも互いに刺激し



BCS賞のロゴマーク
正方形の中に建物デザインした図形は、1964年東京オリンピックのシンボルマークなどを手掛けた、日本を代表するグラフィックデザイナーの亀倉雄策氏による作品である。



土木賞のロゴマーク
多様な関係を六角形の輪郭とし、その中に代表的な土木構造物のダム・トンネル・橋を立方体として3次元で表現。3Dデータ活用などの施工プロセスを具現化した。